



平井和正  
Kazumasa Hirai

# 中超革命 学生的生命 集团的

禁止  
版  
立  
讀  
ち  
み

© 文庫 @Bunko

# 目次

## 《登場人物紹介》

PART	1	果たし状
PART	2	決闘！ 稲荷境内
PART	3	宇宙人ミスターX
PART	4	冷たい現実
PART	5	ランチ
PART	6	家出
PART	7	超人会議
PART	8	悲しきミソツカス
PART	9	ヨコジユン売りだす
PART	10	成功のにかき香り
PART	11	暴君
PART	12	天才の孤独
PART	13	アトラスX
PART	14	黒幕の秘密
PART	15	勧告決議
PART	16	超人の掟
PART	17	脅威のGコン
PART	18	人類は敵か？
PART	19	造反有理
PART	20	破壊工作員
PART	21	小便小僧

あとがき	PART	34	終
あとがき	PART	33	無責任な結果
	PART	32	アトラスの最期
	PART	31	襲撃
	PART	30	決起
	PART	29	女闘士
	PART	28	八千ヤ八千ヤの章
	PART	27	生き埋め
	PART	26	女のたたかい
	PART	25	大活劇
	PART	24	超能力・性転換
	PART	23	絶体絶命
	PART	22	企業防衛同盟

《登場人物紹介》



ふじ  
藤 ケイコ

歌手ではなく「超革中」の美人秘書のチーフ。すごい美人。拳銃と拷問の名人。



わたびき ひろし  
綿引 宏

「超革中」の誇る天才的キチガイ科学者。上品なので「ワタビキ殿下」と呼ばれる。



よこ た じゅんや  
横田 順弥

身長 150cm 体重 43kg。美男子。天才マンガ家。ニックネームはヨコジュン他多数。



さとう マチャアキ  
佐藤 正明

金もろけの鬼才。ニックネームは「マチャアキ」時として殺人鬼ムードをただよわす。



た しろ しんいちろう  
田代 進一郎

冷酷無残な権力主義者。ページを追うにつれて残酷になる。「ハナの田代」と呼ばれる。



かがみ あきら  
鏡 明

身長 186cm 体重 80kg。偉丈夫。不世出のプロレスラー。リングネームはアトラスX。



りん せきりゅう  
林 石隆

長髪の中学生。抱腹絶倒の超能力の持主。中国人ではなくレッキとした日本人。

この物語はフィクションである。類似する人物、団体、事件、宇宙人等が存在しても、すべて偶然の一致である。

拝啓……

御なんじに<sup>決</sup>結闘を申しこむもの也。

今晚八時、れいの稻利<sup>荷</sup>の

境<sup>内</sup>分<sup>内</sup>にきたれ。界<sup>介</sup>添人は

ふたりつれてきてても兼いが、

勝負はあくまでも一対一だから、

そのつもりで…… 貴様<sup>殿</sup>の

祈  
幸運を祈る

鏡明より

横田順弥殿

一九七〇年二月一日

追しん

オレは本気なのダ!!!

前ページのような果たし状をつきつけられたときは、跳びあがるほど驚いた。

この文面だと、本気なのかふざけているのかよくわからない。

学校の授業が終わったとき、同じクラスの田代進一郎がニヤニヤうす笑いしながら届けてきたのだ。

「それじゃ。たしかにわたしたぜ、ヨコジュン」

と、田代はホホホと奇妙な笑い声を残して立ち去った。

「なんだなんだ？」

「ラブレター？ いいな、いいな」

同じく級友の綿引宏と佐藤正明マチャアキが寄ってきた。

「冗談じゃない。鏡明からだ」

「鏡明からラブレター？ エッチだなあ。ホモホモ・エッチ」

「馬鹿野郎。これは果たし状だ！」

おれの顔から音を立てて血の気がひいた。よくよく見ると、封筒はチラシ広告でつくった手製のしるもので、わざわざ左封じになっていた。（快適な環境！ 公害からの脱出！）という不動産屋の宣伝文句がすけて見える。

「ふむ。左封じというのは、正式の果たし状だからなあ。そうすると、本気かも知れないなあ」

と、眉まゆをひそめて、綿引宏がいった。彼はどことなく高貴な雰囲気ふんいきを身にただよわせているので、ワタビキ殿下と

呼ばれている。

「それじゃ、追伸の文句はなんだ?! オレは本気なのダ!!! とはなにごとだ! ふまじめだ」

おれは声をふるわせた。

「この果たし状は、全体的総体的にふまじめだ。おもしろくない。ふゆかいだ」

「鏡明に決闘を申しこまれるおぼえでもあるの?」

と、佐藤<sup>マチャアキ</sup>正明がきいた。

「ぜんぜん、身におぼえがない」

果たし状をにぎるおれの手はワナワナふるえた。怒りのためではない。恐怖のためだ。



おれの名は横田順弥とあって、中学生で、チビである。

おれはケンカがきよくたんによわい。得意なのは、マンガをかくことと、落語を一席うかがうことで、ケンカにはなんのたしにもならないのだ。

「で、どうする？ 決闘に応じるの？ やるんならぼくと

殿下で、喜んで介添人になってあげるよ」

マチャアキ 正明が好意的にいった。殿下と正明はひどいやせっば

ちで、これまたケンカざたには、徹底的に縁がない。

「介添人って、ただ見物してるだけだろ？ それなら、ぼくたちだってお役に立てると思うけど」

「見物人じゃないぜ。遺言を聞いたりする役だ」

「ばかばかしい。このふたりの取り柄は、気がいいことだけである。」

「落ちついて、よく思いたしてごらんよ。なにか、鏡明をおこらせるようなことをしたかどうか」

と、殿下がおっとりという。

「だから、なにもおぼえがないって……神かけて誓う。おれは無実だ。真昼の暗黒だ。これは不条理だ。カフカの境界だ」

おれは口走りながら、鏡明の顔を思いうかべて、げっといいたくなった。

鏡明は中学一年のくせに、身長百八十六センチというジヤンボ級の超巨大漢である。体重八十キロぴたり。オールラウンドのスポーツマンで、すごい馬力の持ち主だ。実に

足の文数十三文半という身体障害的怪物なのだ。<sup>もんすう</sup>

学校の凶悪な平井番長一味ですら、鏡明には手をださない。とうに卒業した先々代番長の小松というのが、まだ小学生時分の鏡明にイチャモンをつけ、こっぴどいめにあったことがあり、鏡明にだけは手をだすなど、いいのこしたそうである。ケンカの際にどこかコワされて、内分泌異常で体重九十キロというひどい肥満児になってしまったという。

「鏡明が決闘を申しこむほどおこるんなら、そうとうのワケがあるんじゃないの？」

と、<sup>マチヤアキ</sup>正明がうたがわしげにいった。

「さきに、あやまつちやったら？」

「なんのおぼえもないのに、罪トガもないのに、あやまれるかい」

おれも男だ。身長百五十センチ、体重四十三キロ。超巨人鏡明のしりポケットにねじこまれそうなチビだが、それでもやはり男なのだ。キンタマだって、ちゃんとワンセツト持っているのだ。

「それじゃ、行くの？」  
と、殿下。

「行くさ。おれは逃げやしないぞ」  
おれは語気荒くいった。

「決闘の理由を聞きに行く」  
「すごい度胸だ」と、<sup>マチヤアキ</sup>正明が感嘆した。

PART 2 決闘！ 稲荷境内いなりけいだい

お稲荷さんというのは、なんとなくすぐみがあつて、迷信家でないおれも、悪口だけはいわないことにしている。

死んだ祖母の影響にちがいない。

お稲荷さんをバカにしたり悪口をいったりすると、使いギツネがちゃんと盗聴していて、仇あだをするとおどかされたものだ。

「伊勢屋稲荷に犬の糞くそ」といつて、東京が江戸だったころから、稲荷はありふれたものの代表とされているが、鏡明の指定したのは、かなり大きな社だった。

参道の入り口までは人家が建てこんでいるが、それから一步踏みこむと、燈火もなく、木立ちにかこまれた境内の夜は、ただひたすらまっくらで、鬼気せまるようにものすごい。

夜、ひとりで行ける場所ではなかった。肝試しに絶好のムードである。介添人ふたりぐらいではものたりないほどだ。二十人はほしい。

電気器具商のむすこの正明マチャアキが、店から強力ライトを持ちだしてきてくれた。単一乾電池が六個もはいるやつだ。

「キツネがでるかもしれないな」

と、ワタビキ殿下が心ぼそげにいった。

「正月に、このへんで、駅前駅前の朝鮮料理屋につとめてる若

い人が、キツネに化かされたそうだよ。

「どうしても家に帰れずに、午前一時から午前三時まで、二時間もグルグルひきまわされたんだってさ」

「おい、いやなこといわないでくれ。おれ、オシッコをさつきからがまんしてるんだぞ。チビったらどうしてくれる」

おれはブルブルツとからだをふるわせた。夜風がきゆうにはだざむく感じられた。鏡明のやつ、いやな場所を舞台に選びやがって……。

しかし、そのかわり、決闘のあたえる心理的圧迫感がうすらぎ、さほど気にならなくなってきた。

境内はシーンとすまりかえていた。車の往来の音だけが遠く近くひびくだけだった。

「まだ先方についてないようだ」

ワタビキ殿下が、自慢の国産ダイバー用防水タイムリングつきの腕時計をのぞいていった。

「定刻まで、あと二分二十六秒あるよ」

「一秒でもすぎたら帰ろう」

と、おれはいった。下腹はコチコチにはっている。おれは足ぶみした。

「あ オシッコしたい。果たし状をつきつけた相手が時間をももらなかつたら、決闘はご破算だ。しっかり時計を見てくれよ。うう、もう待てぬ。われわれは待った、熱

烈に待った。だがもう待てぬのだ」

残念ながら、そうはならなかった。正確にいうと時間ぎれ三秒まえに、鏡明の巨体が参道の闇やみから又ツと出現してしまった。やはり介添人をふたり同行していた。同じクラスのエリ石隆と、果たし状をとどけにきた田代進一郎だ。

田代は巨大な鼻の持ち主で、ハナの田代と呼ばれている。エリ石隆はリンセキリュウと中国人まがいの読みかたをされるが、レッキとした日本人だそうだ。長髪なので、しばしば女の子とまちがえられる。

「やあ、よくきたな。感心なチビだ」

鏡明は、恐竜テイラノザウルス・レックスみたいなのに、闇のなかに立ちはだかっていた。声がとんでもない高い位置からふってくる。これでケンカになったら、背伸びしてもおれのゲンコは、鏡明の顔にとどかない。そのかわりキンタマをなぐるにはちょうどいい。

「き、きたとも」

おれは胸をはった。

「おれが逃げるとでも思ったか。さあ、決闘の理由をいつてもらおう。おれはそれを聞ききたんだから……それから、ついでにいつとくけど、果たし状の文章に誤字が五つあったぞ。結闘、稲利、境台、界添人、それから折るじゃなくて祈る、だ。幸運を折るって、いつたいなんのことだ？」

こういうのが、おれの悪いクセだ。つい、よけいなこと

を口走つて、ことをこじらせる。それで、横田はオツチヨコチヨイだとみんなに批判される。

「国語辞典を妹が使つてて、手もとになかつたんだ」と、はたして鏡明はふきげんになった。

「そういうときは、和英辞書を使うといいんだ」と、ハナの田代がいった。

「けっこう代用になるよ。ウソだと思つたらためしてごらんよ」

こいつも、おれに輪をかけたオツチヨコチヨイで、すぐにわきから口をだす。

「和英もないときには、百科事典を……」

「ウルへ〜、ワケをいえ」

おれはめんどろくさくなって、田代のさしで口を切断した。おれはオシッコがつまっているのだ。

「なんで、おれに決闘を申しこむんだ？」

「理由は、自分の胸にきいてみる！」

「きいてみたが、わかんない。はつきりいつてもらいたい」

「思いあたることが多すぎるからだろうぜ。思いおこせば五年まえ、はじめておれとおまえが顔をあわせた小学三年のときから、おまえはおれのことを身体障害とあざけり、笑いものにし、からかいつづけてきた。それでも、おれは歯をくいしばり、じつとがまんしてきたんだ。だが、もう、こんどというこんどは愛想もつきはて、勘忍袋の鼻緒が切

れた。決闘だ。それしかない。カタをつけよう」

「待つてくれ。それだけじゃわからないよ。ゲタじゃあるまいし、なぜ鼻緒が切れたんだ？」

「うるせ〜、とぼけるな横田順弥、やいヨコジュン！」

おまえはきのう、昼休みに、黒板にマンガをかいた。かかなかったとはいわせない」

「ああ、かいた。かいたがどうした？」

「といって、おれはギクリとした。」

「おれにハシゴをたてかけて、桑畑蓉子が登り、首っ玉に抱きついてるマンガだ。その横に、やいヨコジュン、なんていう文句を書いた？　いつてみる！」

「アトラスにハシゴをかけてランデブー……」

おれはしぶしぶいった。巨人アトラスは、おれのつけた鏡明のアダ名なのだ。

ハナの田代がケタケタ笑った。

「あれは、じつにうまかったねえ。いや、じつにうまい似顔だったよ、うん」

「いやなやつだ。」

「おまえはマンガがすごくうまい。それはみとめる」

と、鏡明はいった。

「おれの似顔が、テイラノザウルスそっくりでもがまんする。だが、おまえは桑畑蓉子まで、じつにうまく、そっくりにかいた。だれが見てもひとめでわかる。それなのに、おまえは、ハシゴに登っている桑畑蓉子のスカートのなか

まで、パンティまでかいた。しかも大きなツギのあたったパンティだった。どういつつもりだったか、その精神が知りたい」

「べつに桑畑蓉子のパンティをのぞいたわけじゃないよ」

おれは弁解につとめた。

「つい筆がすべったんだ。はじめはパンティをはかせないつもりで……」

あわててあとのことばをのみこんだ。もつとエツチにかく気だったなんていわないほうがよさそうだった。

「よそのクラスの連中までわざわざ見物にきて大笑いした。センサーたちまで笑った」

鏡明はへんに静かな声でいった。

「桑畑蓉子は、はずかしさと怒りのために泣いていた。そのときおれの胸でブツツと音がしたんだ」

「鼻緒が切れた音だな」

と、ハナの田代が感心していった。

「なにしろ十三文半のゲタの鼻緒だもんね」

「おまえはだまつてる！ とにかく桑畑蓉子のことはゆるせん。桑畑蓉子はおれを愛している。おれはなんとも思っていない。だが、おれのために桑畑蓉子がめいわくしているんだったら、だまつてひっこんではいられない。だから、決闘だ。理由がわかったら、さあ、したくをしろ！」

「ま、待ってくれ」

「もちろん、おれはでかいし、おまえはチビだ。まともに

やったら不公平だ。だから、おれは右腕をしばって左手一本で相手をしてやる。足も使わない。おまえは好きなようにやっていい」

「ついでに目かくしをしないか」

おれは提案した。

「それから両足を折り曲げて、もも腿のところではりつけて……」

「馬鹿野郎、調子にのるな」

と、鏡明はわめいて常人のマキシ・コートぐらいあるでかい上着をぬいだ。どうやら本気だ。おれのヒザはガクガクしてきた。

「ねえ、ここは暗いよ。ころんだらケガするかもしれぬ。あかるい昼間にやりなおそう。見物人をいっぱい集めて、百円ずつ料金をとって……負けたほうが、全部もらうことにして」

「プロレスとまちがえるな。決闘なんだぞ。それに、ちつとも暗くないじゃないか。ナイターの設備があるみたいだぜ」

と、鏡明。

「ほんとだ。いやに明るいな。ぐずぐずしてるうちに、朝になったのかな」

と、ハナの田代がいった。

「まだ午後八時十三分十一秒だ」

と、タイムキーパーみたいにワタビキ殿下。

「朝とはいえないと思うがなあ」

「あれはなんだと思う?」

と、<sup>マチャアキ</sup>正明がけたたましく叫んだ。

「上だ! 上を見てごらんよ」

おれたちは同時に顔をのけぞらせて、頭上をふりあおいだ。

背すじが氷の棒になったような気がした。

「ひっ、<sup>ひとたま</sup>人魂だ」

「ばかいえ。あんなでかいヒトダマがあるもんか」

「じゃ、ジャンボ・ヒトダマ……」

おれたちの頭上、数メートル、バスケット部の巨人アト



ラス鏡明なら、ジャンプすれば手がとどくようなまぢかさ  
に、それは浮かんでいた。

直径十メートルはあるだろうか、緑色の濃い光につつま  
れた円盤状のかたまりだった。

そいつが音もなく空中に静止して、異様な光を、おれた  
ちに投げかけていたのだ。

「キ、キ、キ、キツネ火」

「ち、ちがう、そ、空飛ぶ円盤だ」

ひい、とワタビキ殿下が貴公子ムードににあわぬ悲鳴をあ  
げた。

総毛だつというのはこのことだろう。全身が恐怖のかた  
まりとなった。

「う、動けないよ。からだは動かない」

だれかが泣き声をだした。まるで悪夢である。いかに満  
身の力をこめてみても、全身氷づけにされたように、小指  
一本動かせないのだ。

「夢だ。これは悪い夢なんだ」

と、だれかがうめいていた。

「空飛ぶ円盤につかまっちゃうなんて、夢にきまつてるじ  
やないか。だれか、おれをおこしてくれよ、たのむから。

頭をけつとばしてもいい。ゆるす！」

よく聞くと、おれ自身の声だった。

「夢じゃない！」

鏡明ののぶとい声がどなっていた。

「おれたち、円盤のなかに吸いこまれるぞ！」

いつしか、おれたちの足は地面をはなれ、中空に体重を失ったように浮かびあがっていたのだ。

緑色の光輝につつまれた円盤の底が、みるみる頭上にせまってきた。

「たすけて！」

おれは死にもものぐるいでわめいた。

「食われるのはいやだ。死にたくないよ」

熱い湯のようなものが腰と股またをぬらした。

おれはついに恐怖にたえかねて失禁してしまったのだ。

つまり、ひらくくいえば、オシッコをもらしてしまったのである。

### PART 3 宇宙人ミスターX

おれたち六人は、巨大なカプセルのようなへやにとじこめられていた。

そこは無重力空間だった。六人とも宇宙遊泳中の宇宙飛行士みたいで、思いおもいのかっこうで宙ぶらりんになっていた。いぜんとして、からだの自由はまったくきかない。カプセル内は、あの光源のわからない、緑色の光に満たされていた。まるでバスクリンを溶かした水槽のなかにぶちこまれたような気がした。

六人全員の顔が、気味悪い緑色にそめあげられ、この世

のものと思えなかった。気がつくと、おれは呼吸をしていなかった。おそろしく静かなのに、心臓の音さえ聞こえないのだ。

たいへんだ。おれはついに死んでしまったらしい。とすれば、ここはあの世か。おれは深い悲しみにとらわれた。なにしろ、おれは死にぎわに小便をもらしてしまったのだ。なんとというはしたなさ、みっともなさだろう。ヨコジンはオシッコで下半身をずぶぬれにして死んだと笑われるにちがいない。無慈悲なクラスの女どもは、おれの葬式で、顔をゆがめ笑いかみころすにちがいない。なんとという恥辱、なんとという屈辱、おれは死にたいいや死んでも死にきれないとはこのことだ。おれは怨霊おんりょうとなつて、おれを笑った女どもをひとりのこらず、とり殺してやるのだ。

どうやってとり殺してやるうかと考えているところへ、その声は、どこからともなくやってきた。

ひびきのない、うつろな、単調な声……とても人間の声とは思えなかった。いや、声ではなかったのだ。

頭の内部、つまり脳に直接話しかけてくることばだったのである。超心理学（パラサイコロジー）でいうテレパシ―とはこのことであろうか。

「余は、いまここに、汝ら六人なんじを選べり」と、声は重おもしろくのたまわった。

「聞け。地球の子らよ。地球人はいよいよ外宇宙へ進出せんとするなり……」

余　なんて、ずいぶん大時代な一人称を使用するテレパシーの　声　は、やけにこむずかしいことばづかいできた。ピンとこないといけないから、わかりやすく現代語訳にしておく。

「地球人類が、宇宙的にみて最高級の凶暴なる種族だということとは、よくわかっているから、このまま野ばなしにしてはおけないのだ。なにしろ　余　は、人類が地球にわいてきてから百万年というもの、じっくり観察してきたのだからね。いま米軍がベトナムでやっているようなひどいことを、外の宇宙でやられてはこまるんだ。」

そこで、地球人が心をいれかえて、宇宙平和をまもつていけるかどうか、試験を試してみることにした。不合格なら、落第や浪人どころか、人類は滅亡するのだ。

われわれは平和を好む種族だから、米軍みたいに直接介入はやらない。人類には、おのが手で自滅してもらうことにする。

そこでその方法だが、人類のなかからいく人かを選び、ずばぬけた超人能力をあたえることにした。といつても、人類のうちひそんでいる未開発の能力をひきだしてやるだけなんだが……この緑色の光線をあびた諸君六人は、脳細胞にひそんでいた全能力をフルに使えるようになった。

諸君はいまや、人類の平均をはるかに超える存在、すなわち超人となったのだ。その超人能力の使いかたは、諸君の自由意志にまかせる。世界を滅ぼすなりなんなり、好き

にしてよい。

諸君にうまくやれるとは期待していないし、強力な超人能力の使用法をあやまって、人類をあつさり滅亡させてくれれば、じつをいうとこちらは歓迎なのだが……では、諸君の幸運を祈る！」

PART 4 冷たい現実

白状する。

しめた！ と、なによりもまず、おれは歓喜したのである。

超人と化したおれは、もはやヨコチビなどとあざけられずにすむのだ。アトラス鏡明のごとき筋骨たくましい巨体の持ち主になれるのだ。

なぜなら、チビの超人というのは、あまり聞いたことがないからである。

そして、さらに かわいい女の子たちは、おれを熱い尊敬と崇拜のまなざしでながめ、競争でおれの愛をもとめてくるであろう。むらがる美女たちを整理するために、警視庁機動隊を総動員しなければならぬであろう。

かつて、おれをチビだのヨコチビだの、コロポックル、ピグミーなどと呼び、侮蔑ぶべつとあざけりの目でみた女の子どもは、後悔の涙で夜ごとマクラをグツシヨリぬらすことになるのだ。

どうしてくれよう、と快感にゾクゾクしながらおれは思った。彼女たちが泣きさげびつつのたうちまわるのを、冷たくニヒルに笑ってながめるべきか。

いやいや、そんなことをすれば、彼女たちは悲しみのあまり自殺してしまう。やっぱりゆるしてやろう。そんなに泣かなくてもいいのだよ。諸君の真情はよくわかった。快くゆるす。笑ってゆるす。おれは心がひろい、親切なヒューマンイズムあふれる超人なのだから……。

なに？ お詫<sup>わ</sup>びのしるしにキスしたいだって？ 又又、よろしい、ひとりずつ順番だよ。おさないでおさないで。いっぺんにおしよせられると混乱しちゃってこまるヨン。これだけどっさり相手にキスすると、唇がはれあがつちまうぜ。

おお、きみはあの桑畑蓉子ではないか。きみはだめだ。きみにはかの鏡明という恋人がいるではないかね。鏡明がおこるぞ。そうか、鏡明はもうやめたのか。あなたのほうがよっぽどステキだった？ ふむふむ、なにしろおれは鏡明よりかだいぶ美男子だもんね。衆目の一致するところだもんね。いや、ごもつとも。ざまみろい、鏡明め。身体障害的ウドの大木め。

「なにをいつまでゴジヨゴジヨうわごとをいってやがんだ。寝ぼけるな、チビ！」

と、鏡明が<sup>だいかっ</sup>大喝した。

おれはポカンと口をあけて、目のまえの鏡明をはじめと

する五人をみかえした。

むろん、おれの立っているのは、もとの夜の稲荷の境内  
だったのである。

「なんだ。やつぱり夢か……」

円盤などあとかたもない。

「どうせなら、もうすこしさきまでみたかった」

「ところが、ただの夢じゃないらしい」

と、マチヤアキ正明がいった。

「六人そろって同じ内容の夢をみるとは思えない。集団幻  
覚ってやつならともかく」

腰のへんがヤケに冷たい。ズボンが重くぬれ、足のはだ  
にへばりつき、ズックぐつのなかまでズボズボしていた。

冷たい現実とはこのことである。ともかく、おれがオシ  
ッコをもらしたことだけは、夢でない。

「聞いたぞ、ヨコジユン」

と、巨人鏡明が、いたく気分を害した声でいった。

「ひでえ野郎だ。おまえはその程度のやつだったんだな。  
女の子にモテることしか頭にないとは、見さげはてたやつ  
だ」

「百八十六センチのおまえにかかったら、だれだって見さ  
げられる」

おれは、気味悪くハダにからみつくズボンの生地を、そ  
とつまみあげながら反論した。

「しかし、どうもいつこうに超人になったような気がしな

いんだがな。ひよつとしたらだまされたんじゃないか？」

「ただいまの時刻は、午後八時十四分三十八秒だ」

タイムキーパーのワタビキ殿下が報じた。

「円盤が出現したときから、わずか一分二十七秒しかたつていない。これは、ふしぎだが本当だ」

「やっぱりキツネのしわざじゃないか」

おれはブルルツと身ぶるいした。

「キツネが宇宙人に化けるなんて、こりゃ新趣向だぜ。SFを読んでるキツネにちがいない。すごく進歩的なキツネだ。二十世紀フォックスだ」

とたんに鼻の奥がムズムズして、たてつづけにクシャミがとびだした。

「もう帰ろうよ」

マチャアキ 正明もおじげづいた声をだした。

「なにかヘンな匂においがするよ。なまぐさい匂においがする。やっぱりキツネだ！」

体温にあたためられ、小便の強烈な匂においが発散しはじめていたのである。

悪臭の出所がバレませんように、とおれは必死に念じていた。

「ひい」

殿下が金切声をあげて、こけつまろびつ走りだした。一同がどつとあとにつづく。

「キツネが追っかけてくるう！」

ズボズボペシャペシャと異様な音響を発しているのは、  
むろんおれのくつのなかだったのである。

（続きは正式版でお楽しみください）

e文庫 <http://www.ebunko.ne.jp/>

# 超革命的中学生集団

## デジタル立ち読み版

発行日 2000年12月30日

著者 平井和正

イラスト 生頼範義

デザイン 伸童舎

発行 有限会社ルナテック

〒125 0041

東京都葛飾区東金町3 13 6

info@ebunko.ne.jp

<http://www.ebunko.ne.jp/>

(C) KAZUMASA HIRAI, NORIYOSHI OHRAI,  
LUNATECH

本作品は著作権上の保護を受けています。本作品の一部あるいは全部について、無断で複写・複製・転載することは禁じられています。